100TH ANNIVERSARY CELEBRATIONS

1921-2021

三重大学
生物資源学研究科
100周年記念誌

～生物資源学研究科100年の歩み～

三重大学生物資源学研究科100周年記念事業実行委員会

MIE UNIVERSITY

生物資源100周年記念事業一覧

2021年12月　三重大学大学院生物資源学研究科オープンラボ2021開催

2022年3月　三重大学大学院生物資源学研究科環境農林水産フォーラム in北勢開催

2022年4月　三重大学生物資源100周年記念ロゴマーク公募

2022年6月　三重大学振興基金における100周年記念事業プロジェクト設立
三重大学生物資源100周年記念ロゴマーク決定

2022年9月　三重大学生物資源100周年記念式典開催

2022年12月　三重大学大学院生物資源学研究科オープンラボ2022開催

2023年2月　三重大学生物資源100周年記念植樹

2023年5月　三重大学生物資源100周年記念誌発刊

生物資源100周年記念誌

目 次

・生物資源学研究科の歴史

100年の変遷

100年の思い出

・記念イベント紹介

イベント① オープンラボ2021開催

イベント② 環境農林水産フォーラム in 北勢開催

イベント③ 100周年記念ロゴマーク

イベント④ 100周年記念式典

イベント⑤ オープンラボ2022開催

イベント⑥ 100周年記念植樹

イベント⑦ 100周年記念誌出版

研究科長　祝辞

生物資源学研究科長
松村　直人　　教授
（資源循環学専攻）

1.100周年に寄せて

三重大学生物資源学部・生物資源学研究科は，1921年（大正10年），大学の前身となった三重高等農林学校として設置されて以来，三重大学農学部，三重県立大学水産学部と移管後の三重大学水産学部，そしてそれらの統合としての生物資源学部を経て，　2021年（令和3年）12月10日をもって100周年を迎えました。

関係者の方々への感謝の気持ちと共に，本学部・研究科の理念と姿を広く社会に発信するため，学部・研究科内で行っている様々な年間行事等を「三重大学生物資源100周年記念行事」と位置づけ，卒業生や同窓会をはじめとした学部・研究科に関係する多くの方々との絆の強化を2023年（令和5年）3月まで進めることとしました。

コロナ禍において，一昨年12月24日生物資源学研究科オープンラボを，昨年3月には三重大学全学として取り組んでいる北勢サテライトと連携して，環境農林水産フォーラムin北勢を開催し，四日市の会場では対面での講演，ブース展示などを行いました。

9月10日には，三翠同窓会総会に多くの同窓生が集まる機会にあわせ，100周年記念式典を企画し，残念ながら，関係する多くの方々を会場にはお招きできず，YouTubeを通しての式典となりました。

2.高等農林について

明治の初めに，西洋農業の導入にあたり，札幌農学校と駒場農学校が設立されました。札幌農学校はクラーク博士で有名ですが，アメリカの農業を学び，駒場農学校はドイツの農業に学ぼうとしました。それぞれ，現在の北海道大学，東京大学の農学部の前身となります。

一方，農学関係の独立した高等教育機関として明治の終わりに，高等農林学校が設立されます。盛岡，鹿児島に続き，大正に入り，鳥取，三重，宇都宮と設立されていきます。同時代に設立された高等商業学校，高等工業学校と少し性格が異なり，高農の場合は農業教育全体においても中等教育以下が重視され，大学への昇格も遅れたようです。高農が重視されなかった背景には，当時の産業構造の中で農業の位置が相対的に低下していたことや，高農における教育が研究中心であり実際の農業経営には役立たないという批判が多かったことなどがあげられています。実際，農業に就くものは少数であり，むしろ官吏として農業の指導奨励にあたるものが多数だったようです。

3. 農学の高等教育

80年も前から日本における農学教育の問題点が指摘されているのは興味深いところです。戦後の農学部の時代にあっても，「農学栄えて農業滅ぶ」とか，「林学栄えて林業滅ぶ」という批判を聞いてきました。三重大学は生物資源という言葉を初めて学部名に冠した大学で，全国でもユニークな農学系学部としてその特徴を誇っております。「山の頂から海の底まで」をキャッチフレーズに，広大なフィールドを教育・研究の対象とし，自然環境の保全と農林水産業及びその関連産業，食料，環境，健康，バイオにかかわる多様な産業振興を担う人材の育成を目指しています。

4. 三重大学の特徴

三重大学は，農場，演習林，水産実験所，練習船勢水丸，鯨類研究センターと多彩な附属施設を有しております。2022年は農場，演習林，水産実験所を統合して，「紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター」発足20周年の記念の年でもあります。

紀伊・黒潮生命地域とは，紀伊半島スケールにおいて，まずは，我々の存立する教育研究対象地域であり，このロケーションにあって初めて展開できる教育研究があり，逆に私たちはそのような自然条件，社会条件を受け入れ，地域と連携する必要があります。

また，三重大学では地域創生への取り組みの一つとして，2016年から「地域拠点サテライト」による活動をスタートさせました。「地域拠点サテライト」では県内全域を教育研究フィールドと位置付け，地元企業や自治体と大学を繋ぐハブ機能として，多様な地域特性を有する北勢，伊賀，伊勢志摩，東紀州の4つの地域サテライトを展開しています。

5. 次の100年へ

全国農学系学部長会議では，平成14年に農学憲章を定め，農学の理念として，地球という生態系の中で，環境を保全し，食料や生物資材の生産を基盤とする包括的な科学技術および文化を発展させ，人類の生存と福

祉に貢献することであるとしています。また，農学の定義として，人間の生活にとって不可欠な農林水産業ならびに自然・人工生態系における生物生産と人間社会との関わりを基盤とする総合科学であり，生命科学，生物資源科学，環境科学，生活科学，社会科学等を重要な構成要素とする学問であるとしています。

さらに，農学の特質として，農林水産生態系の持続的保全と発展を図りながら，人類と多様な生物種を含む自然との共生を目指す総合科学であり，その意味において，他の学問分野とは異なる独自の存在基盤を有するとしています。

農学系学部においては，農林水産業に従事する人材を養成することを優先的な目標にはしていませんが，大学で学んだことや社会に出て経験したことをベースに農林水産業の新しい展開，いわゆる「6次産業化」や「スマート農林水産業」に取組む人材も出てきています。

また，近年，異常気象の頻発など気候変動が顕在化しています。生物と環境から構成される地球システムは，食料，環境，エネルギーなど，カーボンニュートラルな持続可能な社会を構築していく上で，緊急に取り組まなければならない多くの課題を抱えており，農学が果たす役割はますます大きくなっています。

本学においても，農学に関する教育研究を振興することにより，チーム生物資源が一丸となって，人類福祉の向上に貢献していくことが次の100年に向けた使命であると確信しております。このような継続した人材育成こそが大学において可能な高等教育の方向性と思います。これまで諸先輩方を輩出してきましたように，さらに，次の100年，有為な人材を育てていきたいと思います。

同窓会長　祝辞

三翠同窓会 会長
前川　行幸　名誉教授

三重大学大学院生物資源学研究科100周年おめでとうございます。同窓生を代表して一言挨拶させていただきます。ひとえに100年と申しましても，大正10年（1921年），三重高等農林学校設置にその端を発します。以来多くの卒業生を輩出し，その人数たるや2万数千名に達しております。私もそのうちの一人です。

私は昭和47年（1972年），三重県立大学水産学部卒業です。古い話です。この年に三重県立大学は国立移管され，さらに昭和62年（1987年）に農学部と水産学部が統合され全国初の学部統合により生物資源学部に改組されました。私は卒業後しばらくの間他大学の大学院に進学しましたが，その後本学に教員として赴任し，以来65歳の定年，その後5年の産学連携コーディネータを経て，指折り数えますと学生時代を入れ約50年この大学にお世話になりました。本学100年の歴史の半分をこの大学ですごさせていただきました。ありがたいことです。

私が入学した三重県立大学水産学部の場所は現在県立美術館のあるところ，木造2階建ての一般講義棟と池の畔に赤い屋根の瀟洒な専門校舎がありました。講義棟は戦前からの古い校舎で，風が吹くと窓ガラスがガタガタとうるさい。津駅西口から舗装されていない凸凹の坂道を登って15分，少し先に行ったところに津商業高等学校があり，女子学生と一緒に通学。講義棟は今のプラネタリウムのあるところ，丘の上の美術館のところは運動場であった。キャンパスと呼べるようなものではなく，今は，回りは落ち着いた住宅街であるが，当時は藪だらけ，運動場には草が生え，野ウサギとタヌキが時々競争していた。農学部は今と同じ場所にあり，現在の三重大学キャンパスは当時はだだっ広い附属農場であった。

本学の歴史を物語る建物として，三翠会館が本学部の西側にあります。この建物は昭和11年（1936年）に同窓生の献金により建築されたもので，有形文化財に登録されています。内部には三翠同窓会の本部事務局があり，生物資源学研究科の歴史を物語る資料が数多く展示されております。キャンパス南門近くにもう一つの有形文化財，旧帝国ホテルの建設に携わったアントニン・レーモンドが設計したレーモンドホール（旧三重県立大学附属図書館）もあり，一度ぜひお立ち寄りください。

さて，同窓会というのは大学の社会における最大の応援団と考えております。同窓会は卒業生の親睦だけでなく，母校並びに卒業生の発展を図ることが大きな目的であり，今後とも同窓会としては，母校と連携しながら卒業生のみならず在学生も含めて，母校の発展に寄与していきたいと考えております。そのためにも同窓生の方々，本学教職員および関係機関の皆様方の，同窓会へのご理解とご支援を切にお願いいたします。今後の本学の益々の発展を祈念いたしまして，同窓生代表の私からの祝辞とさせて頂きます。

≪100年の変遷≫

年表（―建設期―）

昭和初期の江戸橋

昭和2年頃の授業風景

昭和4年頃の江戸橋駅

昭和7年頃「高農行き」のバス

昭和30-40年頃三重大学前のバス停

昭和30-40年頃の大学前（国道23号線）

昭和30-40年頃の津駅

昭和40年前後の津市中心街（丸の内）

三重高等農林学校開校十周年イベント
（昭和6年12月）

三重高等農林時代の三翠会館
（昭和11年竣工）

三重高等農林学校農場

時間軸

大正10年 1921年

大正11年 1922年

大正14年 1925年

昭和19年 1944年

昭和22年 1947年

昭和24年 1949年

昭和25年 1950年

昭和26年 1951年

昭和28年 1953年

昭和30年 1955年

三重高等農林学校設置（12月）

初耕式（5月）

三重高等農林学校附属演習林設置

三重農林専門学校設置（4月）

三重水産専門学校設置（5月）

三重大学農学部設置（5月31日）

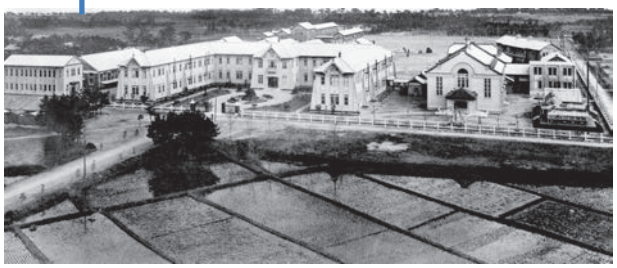
三重大学農学部
農学科，農業土木学科，林学科，農産製造学科の4学科設置

三重県立大学水産学部設置（6月）

三重大学農業別科設置（4月）

三重大学農学部農学専攻科設置（7月）

改組
総合農学科設置
（1953年4月1日）
農学部農産製造学科を同農芸化学科に改組し，総合農学科設置


高等農林学校全景
（上浜キャンパス）

演習林

演習林と演習林寄宿舎
（昭和2年2月～昭和52年10月）

三重高等農林時代の熱帯温室
（昭和6年3月31日竣工）

水産学部校舎（大谷町）

三重農林高等「三翠寮」
（大正11年4月8日竣工，20日開舎。翌年2月11日に「三翠寮」と命名 ）

1921年～1931年～1941年～1951年～

生物資源学部教育組織体制

1学科6コース：入学定員数計306名

- 生物資源学科
  - 農業生産学コース
  - 農業土木学コース
  - 森林資源学コース
  - 農芸化学コース
  - 生物生産機械学コース
  - 水産学コース
    - 海洋生産学サブコース
    - 水産増殖学サブコース
    - 水産食糧学サブコース

※1995年に8コースに再編

4附属施設設置完了

三重大学 生物資源学部設置
農学部・水産学部を統合し，三重大学生物資源学部生物資源学科設置（10月1日）

三重大学大学院 生物資源学研究科 博士課程設置（4月）

三重大学大学院 生物資源学研究科 修士課程設置（4月）

三重大学大学院 水産学研究科 修士課程設置（4月）

水産学部 附属練習船勢水丸設置（4月）

水産学部 附属水産実験所設置（4月）

三重大学水産学部 水産学科設置（5月）

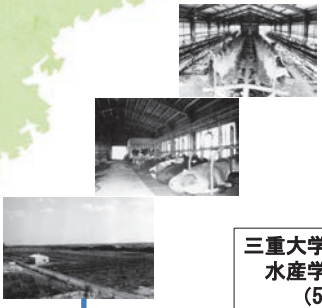
農学部附属農場 高野尾地区へ移転（4月）

三重大学大学院農学研究科 修士課程設置（4月）

水産実験所設置（4月）

改組
農業機械科設置
（1964年4月1日）
総合農学科を廃止し，農学部農業機械科を設置。同年水産実験所も設置

平成3年 1991年
昭和63年 1988年
昭和62年 1987年
昭和51年 1976年
昭和54年 1979年
昭和49年 1974年
昭和47年 1972年
昭和45年 1970年
昭和41年 1966年
昭和39年 1964年



初代勢水丸
（1980年7月10日竣工）

水産実験所　水産製造実験工場

農学部校舎

水産学部キャンパス

水産学部校舎

コラム（1）
≪学部教育体制≫
生物資源学部の誕生に伴い，教育組織は旧体制の農学部5学科7コース，および水産学部1学科3コースから，1学科6コースに改編

コラム（2）
≪大学院教育体制≫
●修士・博士前期課程（5専攻）
・農業生産学専攻
・森林資源学専攻
・水産生物生産学専攻
・生物生産工学専攻
・生物資源利用学専攻
●博士後期課程（3専攻）
・生物資源開発科学専攻
・生物圏保全科学専攻
・生物機能応用科学専攻

1961年～1971年～1981年～1991年～

現在の教育組織体制

学部教育：4学科9コース　入学定員数：260名
大学院教育：博士前期課程3専攻9講座　入学定員数：88名，博士後期課程3専攻6講座　入学定員数：12名

（大学院博士後期課程）

- 資源循環学専攻
  - 資源循環システム科学講座
  - 国際資源循環科学講座
- 共生環境学専攻
  - 気象・地球システム学講座
  - 環境・生産科学講座
- 生物圏生命学科専攻
  - 応用生命化学講座
  - 海洋生物科学講座

（大学院博士前期課程）

- 資源循環学専攻
  - 農業生物学講座
  - 森林資源環境学講座
  - 国際・地域資源学講座
- 共生環境学専攻
  - 地球環境学講座
  - 環境情報システム工学講座
  - 農業土木学講座
- 生物圏生命科学専攻
  - 生命機能化学講座
  - 海洋生命分子化学講座
  - 海洋生物学講座

（学部）

- 資源循環学科
  - 農業生物学教育コース
  - 森林資源環境学教育コース
  - グローカル資源利用学教育コース
- 共生環境学科
  - 地球環境学教育コース
  - 環境情報システム学教育コース
  - 農業土木学教育コース
- 生物圏生命化学科
  - 生命機能化学教育コース
  - 海洋生命分子化学教育コース
- 海洋生物資源学科
  - 海洋生物資源学教育コース
    ●水圏増殖学プログラム　●海洋生産学プログラム

2000年　平成12年　平成14年　平成16年　平成18年　平成19年　平成21年　平成28年　平成29年　令和3年　令和5年　**2023年**

2002年　**2004年**　**2006年**　**2007年**　**2009年**　**2016年**　**2017年**　**2021年**

改組（2000年4月1日）

三重大学生物資源学部生物資源学科を改組し，三重大学生物資源学部資源循環学科，同共生環境学科，同生物圏生命科学科を設置

三重大学 国立大学法人化（2004年4月1日）

改組 大学院重点化（2006年4月1日）

三重大学生物資源学部を大学院大学化し，三重大学大学院生物資源学研究科博士後期課程を改組

改組（2017年4月1日）

生物圏生命科学科を廃止し，生物圏生命化学科と海洋生物資源学科の2学科を設置し，4学科体制に改編

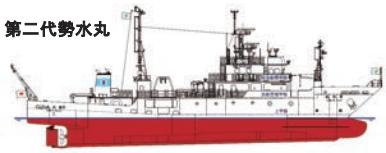
改組（予定）（2024年）

新水産実験所全景

新水産実験所開所（2021年4月16日）

附属鯨類研究センター設置（2017年12月1日）

第二代勢水丸



第二代練習船勢水丸竣工（2009年1月31日）

2010年6月10日に文部科学省より「黒潮流域圏における生物資源と環境・食文化教育のための共同利用拠点」として認定

連携大学院発足（2007年4月1日）

国立研究開発法人「農業・生物系特定産業技術研究機構野菜茶業研究所」（農研機構 野菜花き研究部門），国立研究開発法人「水産総合研究センター養殖研究所（水産研究・教育機構　増養殖研究所）」と連携し，連携大学院を発足。2011年4月1日，国立研究開発法人 森林総合研究所（森林研究・整備機構），2019年2月26日，太陽化学株式会社をそれぞれ連携大学院に加え，連携組織を拡大。

紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター設置（2002年4月1日）

附属施設農場，同附属演習林，同附属水産実験所を改組して設置

2000年～2011年～2021年～

≪100年の思い出≫
ー歴史に残る人物ー

注:※表示は事務取扱い

■三重高等農林学校・・・・・歴代校長

上原　種美
（大正10年12月10日）
初代校長

高橋　隆道
（大正14年3月31日）
2代校長

井上　重陽
（昭和6年12月5日）
3代校長

岡出　幸生
（昭和10年5月31日）
4代校長

藤村　次郎
（昭和11年8月21日）
5代校長

■三重大学農学部・・・・・歴代学部長

岡出　幸生
（昭和24年5月31日）
初代学部長

藤村　次郎
（昭和25年8月21日）
2代学部長

中野　清作
（昭和27年6月12日）
3代学部長

小柳　彌
（昭和35年4月1日）
4代学部長

藤田　時雄
（昭和43年4月1日）
5代学部長

岩本　喜一
（昭和45年4月1日）
6代学部長

緒方　清八
（昭和47年8月1日）
7代学部長

菊岡　武男※
（昭和47年8月10日）
8代学部長

菊岡　武男
（昭和48年5月16日）
9代学部長

白井　清恒
（昭和50年5月16日）
10代学部長

石崎　寛
（昭和52年12月5日）
11代学部長

森　　邦男
（昭和56年12月5日）
12代学部長

熊澤　善三郎
（昭和58年12月5日）
13代学部長

中川　健治
（昭和62年12月5日）
14代学部長

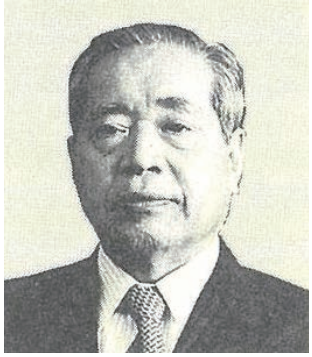
長田　昇
（平成元年12月5日）
15代学部長

野田　宏行
（平成3年4月1日）
16代学部長

■三重大学水産学部・・・・・歴代学部長

岩本　喜一※
（昭和47年5月1日）
初代学部長

榊原　慎吾※
（昭和47年7月1日）
2代学部長



伊藤　隆※
（昭和48年4月12日）
3代学部長

堀口　吉重
（昭和50年9月16日）
4代学部長

鈴木　清
（昭和54年9月16日）
5代学部長

林　孝市郎
（昭和58年9月16日）
6代学部長

野田　宏行
（昭和62年9月16日）
7代学部長

■三重大学生物資源学部・・・・・歴代学部長・研究科長

熊澤　善三郎
（昭和62年10月1日）
初代学部長

野田　宏行
（平成元年10月1日）
2代学部長

高橋　孝雄
（平成5年10月1日）
3代学部長

久能　均
（平成9年10月1日）
4代学部長

小畑　仁
（平成13年10月1日）
5代学部長

天野　秀臣
（平成16年4月1日）
6代学部長・研究科長

三井　昭二
（平成19年4月1日）
7代学部長・研究科長

田中　晶善
（平成20年2月18日）
8代学部長・研究科長

吉岡　基
（平成23年4月1日）
9代学部長・研究科長

後藤　正和
（平成25年4月1日）
10代学部長・研究科長

梅川　逸人
（平成27年4月1日）
11代学部長・研究科長

奥村　克純
（令和元年4月1日）
12代学部長・研究科長

松村　直人
（令和4年4月1日）
13代学部長・研究科長

■三重大学生物資源学部・・・・・叙勲受章者一覧
―国立大学法人化以降―

氏名	所属	表彰名称	受賞年次
熊澤（くまざわ） 善三郎（ぜんざぶろう）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 16 年 秋の叙勲受章者
中川（なかがわ） 健治（けんじ）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 16 年 秋の叙勲受章者
川瀬（かわせ） 恒男（つねお）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 21 年 春の叙勲受章者
松下（まつした） 玄（ふかし）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 22 年 春の叙勲受章者
梅林（うめばやし） 正直（まさなお）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 25 年 春の叙勲受章者
池田（いけだ） 勝彦（かつひこ）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 25 年 秋の叙勲受章者
嶋林（しまばやし） 幸英（よしひで）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	平成 26 年 秋の叙勲受章者
菅原（すがわら） 庸（いさお）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	令和元年 春の叙勲受章者
市川（いちかわ） 眞祐（まさすけ）	名誉教授 元生物資源学部	瑞宝中綬章 （教育研究功労）	令和元年 秋の叙勲受章者

≪100年の思い出≫
―歴史に残る教育研究設備―

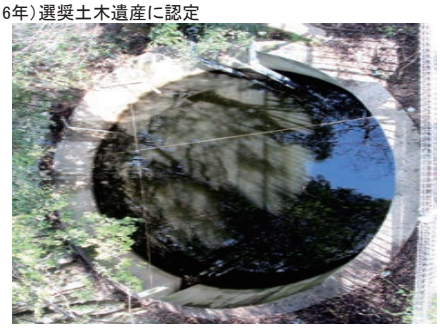
三重高等農林本館　大正13年（1924年）建築

生物資源学部　平成7年（1995年）6月完成

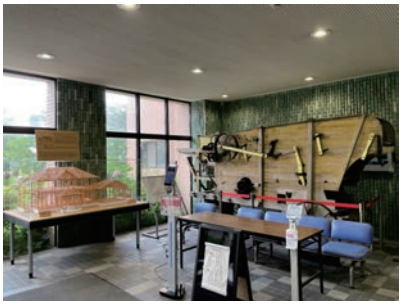
初耕記念のために植えた松（1922年5月10日）

樹齢：100年以上

不渇の水井戸　大正13年（1924年）竣工，平成28年度（2016年）選奨土木遺産に認定



木製脱穀機　昭和初期製造中止となった米国製木製脱穀機



三翠会館

昭和11年（1936）9月24日竣工，平成14年（2002）2月14日付け有形文化財として登録（登録番号：24-0041）

レーモンドホール（旧水産図書館・食堂）

昭和26年（1951年）に建築，昭和27年（1952年）日本建築学会作品を受賞。平成14年（2002年）国登録有形文化財として登録（登録番号：第24-0047号）

≪活躍している研究者達≫

―「三重大X」より―

「三重大X」は，三重大学各研究科の教育，研究及びユニークな取組みに関する情報をわかりやすく紹介する広報誌である。2005年3月に創刊された。以下は当広報誌が創刊以来，掲載された当研究科の取組みの一部分を紹介する。

創刊号
Vol.1
（2005.3）
吉岡　基　先生
生物圏生命科学専攻

Vol.3
（2005.9）
大原　興太郎
（名誉教授）
資源循環学専攻

Vol.4
（2005.12）
林　拙郎
（名誉教授）
共生環境学専攻

Vol.5
（2006.3）
天野　秀臣
（名誉教授）
生物圏生命科学専攻

梅川　逸人
（名誉教授）
資源循環学専攻

伊藤　進一郎
（名誉教授）
資源循環学専攻

Vol.6
（2006.6）
稲垣　穣　先生
生物圏生命科学専攻

Vol.7
（2006.9）
小畑　仁
（名誉教授）
資源循環学専攻

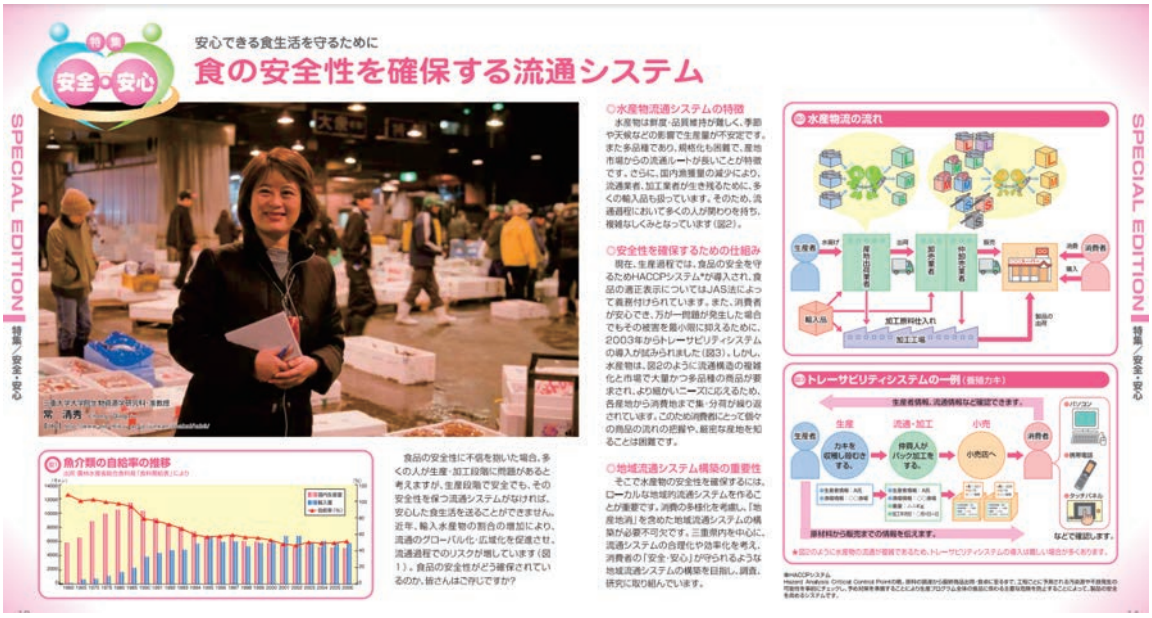
水野　隆文　先生
資源循環学専攻

Vol.8
（2006.12）
橋本　篤　先生
資源循環学専攻

Vol.11
（2007.9）
梅崎　輝尚　先生
資源循環学専攻

Vol.12
（2007.12）
板谷　明美　先生
資源循環学専攻

Vol.13
（2008.3）
常　清秀　先生
資源循環学専攻



Vol.16
（2008.12）
山下　光司　先生
共生環境学専攻

Vol.18
（2009.6）
河村　功一　先生
生物圏生命科学専攻

Vol.20
（2009.12）
Hossain,Zakaria　先生
共生環境学専攻

Vol.21
（ 2010.3）
久松　眞
（名誉教授）
資源循環学専攻

Vol.22
（2010.6）
亀岡　孝治
（名誉教授）
資源循環学専攻

Vol.23
（2010.9）
立花　義裕　先生
共生環境学専攻

Vol.26
（2011.7）
舩岡　正光
（名誉教授）
共生環境学専攻

Vol.28
（2012.7）
沼本　晋也　先生
附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター・附帯施設演習林

Vol.33
（2015.1）
木村　哲哉　先生
生物圏生命科学専攻

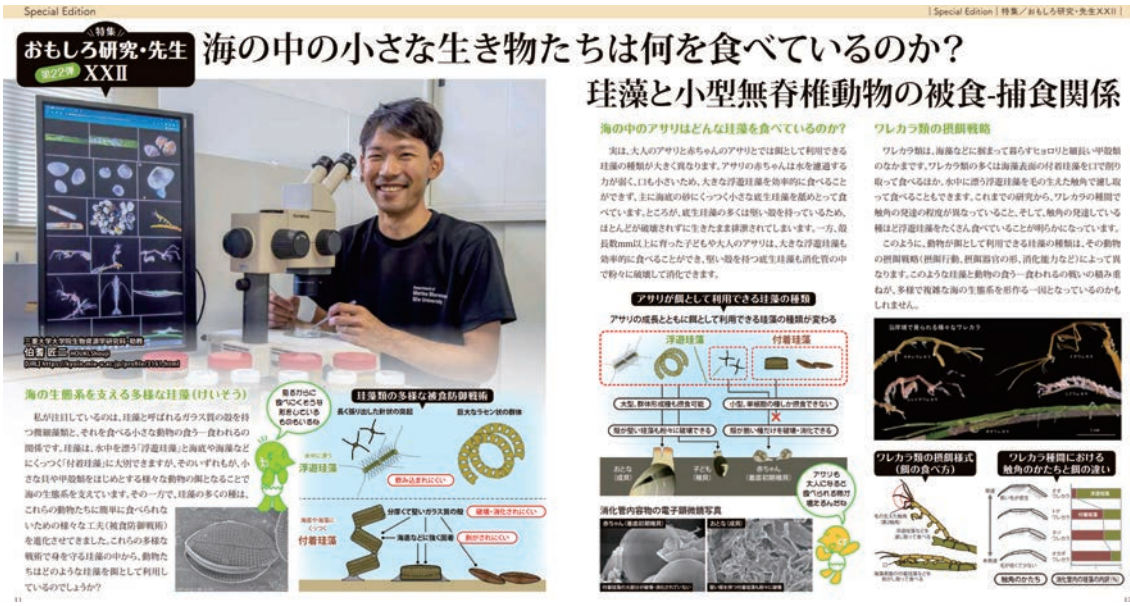
Vol.34
（2015.7）
塚田　森生　先生
資源循環学専攻

Vol.41
（2018.12）
森尾　吉成　先生
共生環境学専攻

Vol.44
（2021.1）
諏訪部　圭太　先生
資源循環学専攻

Vol.45
（2021.12）
田丸　浩　先生
共生環境学専攻

Vol.46
（2022.12）
伯耆　匠二　先生
生物圏生命科学専攻



≪キャンパスの変貌≫

上浜キャンパス（1960年頃）

上浜キャンパス（2020年）

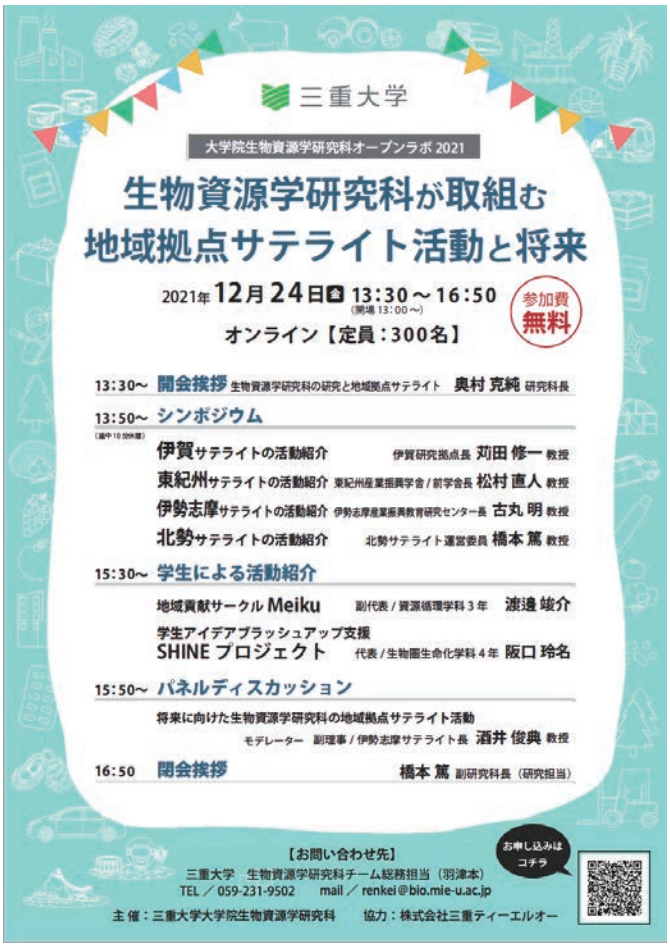
≪記念イベント紹介≫

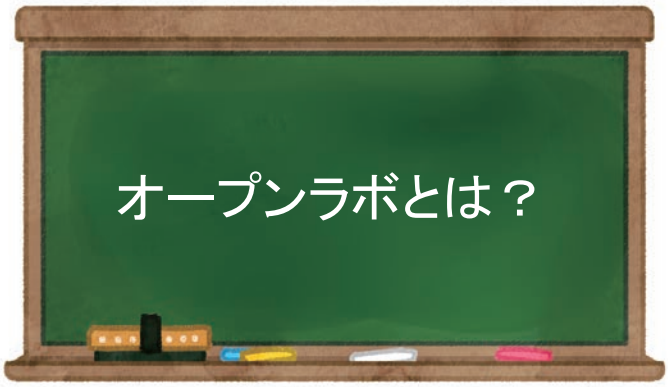
イベント①　生物資源学研究科オープンラボ2021

100周年記念事業の第1弾として，2021年12月24に「生物資源学研究科オープンラボ2021」が開催された。新型コロナ感染防止のため，オンライン開催であった。

本イベントは，三部により構成され，第一部では，研究科がこれまでに取り組んでいた地域拠点サテライト活動について，シンポジウム形式で各サテライト担当教員による報告。第二部では，本研究科学部学生により地域貢献活動内容の紹介。第三部では，研究科の今後の地域サテライト活動について，パネルディスカッションが行われた。

奥村克純研究科長による開会の挨拶





オープンラボは，日頃，教員と学生が研究室で行っている研究の成果を農林水産・食品・バイオ・環境関連の企業や公的機関の方々にアピールし，教育・研究という側面から見た生物資源学研究科に対する理解を深めてもらうことを目的とする重要イベントの一つである。

生物資源学研究科オープンラボー開催実績

開催回数	開催時期	参加者	
		学内	学内
第1回目	平成24年1月7日	145	96
第2回目	平成24年9月21日	100	108
第3回目	平成25年11月17日	40	49
第4回目	平成26年 9月19日	90	84
第5回目	平成27年 8月28日	71	37
第6回目	平成28年9月2日	94	57
第7回目	平成29年9月1日	148	79
第8回目	令和1年9月27日	130	114
第9回目	令和2年12月25日	120	50
第10回目	令和3年12月24日	72	67
第11回目	令和4年12月10日	27	37
計		1,037	778

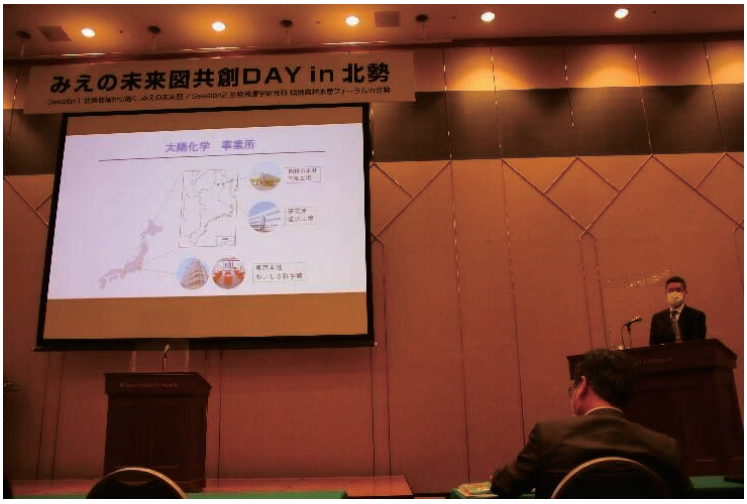
注：学外参加者は，公的機関，農林水産業，農林水産食品企業，工業，商業，建築土木業，及びサービス業など幅広い業界にわたっている。

イベント②　環境農林水産フォーラム in 北勢

100周年記念事業の第2弾として，2022年3月29日に三重大学北勢サテライトと本研究科の共催で「都ホテル四日市」4階「伊勢の間」で，環境農林水産フォーラムが開催された。

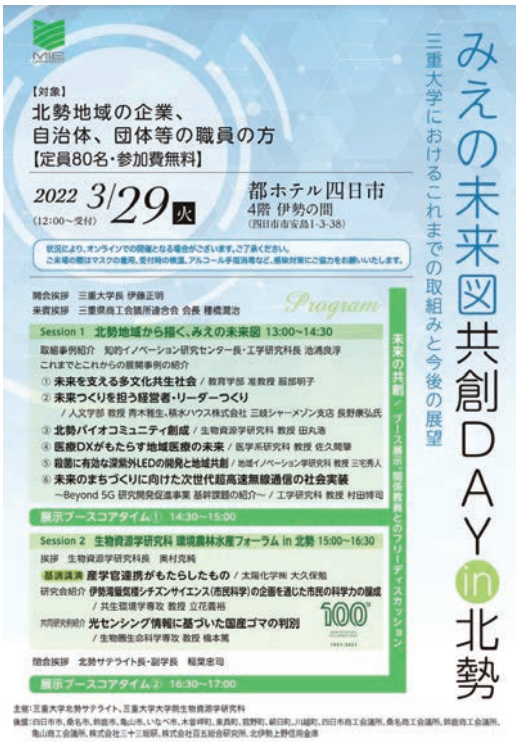
記念イベントはフォーラムSession2で行われ，内容として，太陽化学株式会社様による基調講演と，三重大学が北勢地域で行った研究会の概要，および地元企業との共同研究の概要と成果について，それぞれ当研究科教員により紹介された。

基調講演



題名：産学官連携がもたらしたもの
講演者：大久保　勉　様（三重大学連携教授）
（太陽化学株式会社）

概要：伊勢茶（かぶせ茶）に含まれるアミノ酸，テアニンの生産技術や機能性研究を例に講演があった。



研究紹介①

題名：伊勢湾蜃気楼シチズンサイエンス（市民科学）の企画を通じた市民の科学力の醸成
講演者：立花　義裕　教授
（本研究科共生環境学専攻）

概要：地域と大学が一体となった市民参加型のシチズンサイエンス（市民科学）を通じて，市民の科学力の向上，地球環境へ興味を促す活動などについて紹介があった。

研究紹介②

題名：光センシング情報に基づいた国産ゴマの判別
講演者：橋本　篤　教授
（本研究科生物圏生命科学専攻）

概要：三重大学が北勢地域企業（九鬼産業（株））との共同研究の事例紹介。国産ゴマの現場対応型簡易識別方法の概要が紹介された。

イベント③　100周年記念ロゴマーク募集

100周年記念事業の第3弾として，2022年4月25日～2022年5月20日にかけて，三重大学在校生・卒業生および教職員（常勤・非常勤を問わず）に向けて本学部・研究科のロゴマークの募集を行った。ロゴマーク募集の目的，選定基準，選定方法および表彰・公表などの実行委員会の実施方針について，下記の通りである。

・募集目的　**学生・卒業生及び教職員の一体感を高めると共に，ステークホルダーの皆様から親しまれ続けること。**

・募集内容

①三重大学生物資源学部・大学院生物資源学研究科の特色がイメージされている。
②100 周年記念に拘らず，長く使用できるデザインである。
③各種ポスターや名刺等への記載も想定したサイズで，簡潔・明瞭なデザインである。
④文字・図柄の組み合わせは自由とする。
⑤色彩は自由とし，モノクロ加工にも対応できる。
⑥自作・未発表で，他者の著作権及び商標権等を侵害しない。

・選定方法

三重大学大学院生物資源学研究科の生物資源 100 周年記念事業実行委員会が厳正に審査を行う。

・表彰及び公表

最優秀賞1点

【賞状・副賞（50,000 円相当ギフトカード）】

受賞者については，2022 年 6 月頃に本学部・研究科ホームページに結果を掲載し，生物資源 100 周年記念行事において表彰する。なお，優れた作品の応募が多く，同実行委員会が認めた場合は，優秀賞（副賞あり）を選ぶ場合もある。

イベント④　100周年記念式典

100周年記念事業の第4弾として，2022年9月10日に三重大学生物資源学部校内（2階大講義室）で100周年記念式典が行われた。本式典は，オープンキャンパスと，毎年9月に開催されている三翠同窓会総会の時期に合わせて開催したため，当日，会場には120名ほどの同窓生の皆様が集まり，現役の教職員・学生諸君と一緒に100年の歴史を振り返ることができた。

開式の辞
・研究科長式辞
・学長祝辞
・来賓祝辞
文部科学省
三重県
三重大学三翠同窓会

生物資源100周年記念ロゴ制定式

記念講演
第一講演
森林がもたらす文明盛衰の歴史に学ぶ
矢部　三雄　氏

第二講演
三重大学生物資源学部・生物資源学研究科の歩み
梅川　逸人　氏

開式の辞

松村直人研究科長による式辞

伊藤正明学長による祝辞

来賓祝辞

文部科学省（文部科学省高等教育局国立大学法人支援課　課長　平野誠様による祝辞）
平野誠様が高等教育局長池田貴城様からの祝辞を代読し，祝辞の中，生物資源学部の位置づけ，これまでの教育・研究に対して評価，最後に，生物資源学部に対する期待として次のように述べられた。生物資源学部には，中部・東海，近畿・関西地域における地域中核大学の農学・水産系学部として，また，地域に根ざし世界に貢献する生物資源学部として，教育研究，地域貢献など様々な分野での活動を充実させていくことを期待している。

三重県（三重県農林水産部　部長　更屋英洋様による祝辞）
三重高等農林時代から，一次産業のみならず多くの分野で多数の人材を輩出しながら，何度かの変革も経て100周年を迎えたことへの祝意を述べた後，地域における大学の役割が注目されている昨今，シンクタンクとしての機能などの幅広な貢献があり，生物資源の役割がとても大きいこと，三重県農林水産部とは三重県と大学のシーズをもとに成果をあげており，今後も，三重県はもとより，広く国際社会への貢献への期待も述べられた。

三翠同窓会（三翠同窓会　会長　前川行幸名誉教授により祝辞）
前川会長は，三重大学三翠同窓会を代表として，ご自身の学生時代から退職後の時間も含める多くの思い出，生物資源100年のうちの50年間，生物資源に関わってこられたこと，学部・研究科の発展において同窓会が果たしてきた役割と位置づけ（応援団）を述べられた後，当日参加者に配付された100周年の沿革をまとめたリーフレットを手にしながら，同窓会が引き続き研究科を応援していく旨と，生物資源のこれからの更なる発展と飛躍への期待の言葉を頂いた。

生物資源100周年記念ロゴ制定式ーロゴマークの誕生ー

最優秀賞受賞者：加藤　沙耶香さん　共生環境学科4年生

≪ロゴ作成への着想≫

4つの学科の特徴をそれぞれ簡潔にまとめるように試行を重ねました。資源循環学科は双葉，共生環境学科は地球の丸いイメージ，生物圏生命化学科は二重らせん構造のイメージ，海洋生物資源学科は海をイメージした青色を取り入れました。時間的に追い込まれると不思議に力が湧き，このデザインが完成しました。

記念講演・・・・・松村研究科長が座長を務め，以下の二つの講演が行われた。

≪第一講演≫

題名：森林がもたらす文明盛衰の歴史に学ぶ
講演者：矢部　三雄　様
（一般社団法人・日本木質バイオマスエネルギー協会副会長）

概要：矢部氏より，世界の森林・日本の森林，世界四大河文明の発生と森林，世界の森林の歴史，日本の森林の歴史，日本の森林が維持された要因と持続可能な森林経営，三重県内で100年前に建設された国有林最大の索道・大又索道について，森林の歴史を中心とした貴重なご講演を頂いた。

≪第二講演≫

題名：三重大学生物資源学部・生物資源学研究科の歩み
講演者：梅川　逸人　様
（参与・特命副学長・三重大学名誉教授）

概要：100年前の官報の記事，当時の津北部の地図，高等農林の設置場所，初代校長，校章，当時の学校規則や授業科目，通学用乗合バス，県立水産学部，生物資源学部の設置や生物資源学研究科博士課程の設置などから現在までの生物資源の沿革をダイジェストで，その語り口豊かに多数の歴史的写真も交えて紹介した。

記念式典の司会＆開式・閉式の辞

司会：板谷　明美　准教授
（資源循環学専攻）

開式の辞：神原　淳　教授
副研究科長（教育担当）
（生物圏生命科学専攻）

閉式の辞：橋本　篤　教授
副研究科長（研究担当）
（生物圏生命科学専攻）

式典会場の様子

記念式典後の記念撮影

（伊藤正明学長（中央）と歴代学部長など）

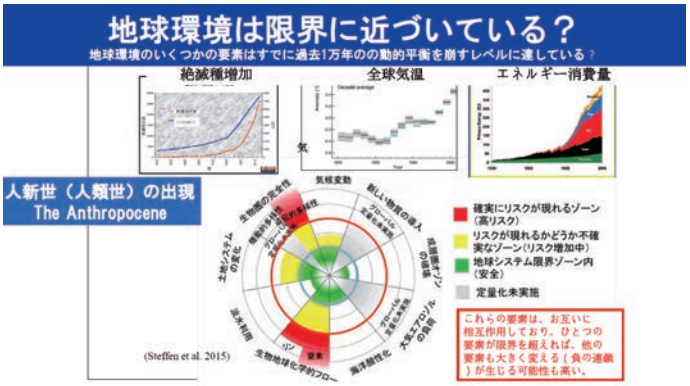
イベント⑤　ーオープンラボ2022ー

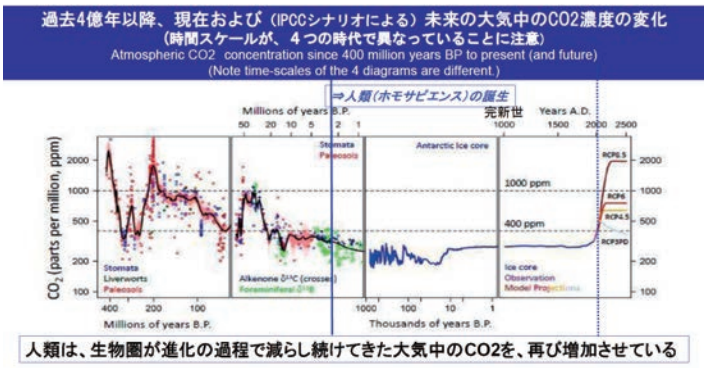
100周年記念事業の第5弾として，2022年12月10日に総合地球環境学研究所安成哲三名誉教授を招き，研究科長補佐（研究企画担当）立花義裕教授が座長を務める「オープンラボ2022」が生物資源学部大講義室にて行われた。その後，研究科教員・学生による研究活動の紹介，研究科副研究科長（研究担当）橋本篤教授がモデレーターを務め，パネルディスカッションも併せて行われた。

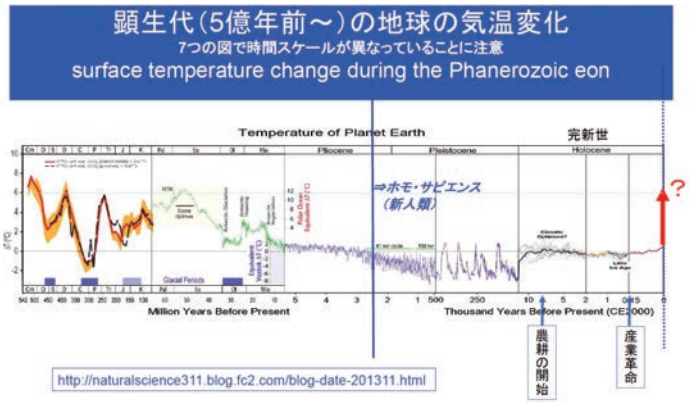
基調講演

題名：地球気候変動における生物圏の役割
講演者：安成　哲三　名誉教授
（総合地球環境学研究所顧問・名誉教授，京都気候変動適応センター長）

概要：現在，人間活動に伴う地球温暖化と地球の気候変動が大きな課題となっている。特に，気候変動が生態系や生物多様性に与える影響は極めて深刻な問題となりつつある。地球の気候変動と生命の長い歴史を俯瞰する研究や，現在の生物圏と気候の相互作用を統合的に捉える研究によると，気候と生物圏は，相互に密接に作用するシステムとして維持され，変化してきたことが明らかになってきた。そのような理解を前提に，私たち人類は，地球の未来はどうあるべきかを考え，行動していく必要がある。







パネルディスカッション

パネリスト左から：松田浩一教授・立花義裕教授・安成哲三教授・関谷信人教授・堤大三教授

参加者とのディスカッション

司会：橋本篤副研究科長

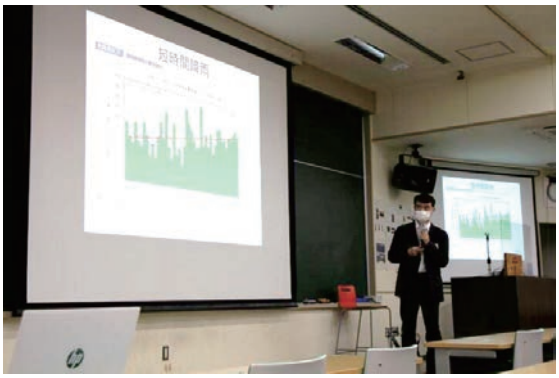
教員・学生による活動紹介

資源循環学専攻　国際資源植物学研究室
関谷　信人（教授）・前　采花（同専攻・博士前期課程1年生）
テーマ『コメと温暖化：標高を活用した実証的分析から将来のコメ生産を考える』

概要：コメ生産体系の構造転換に重要な地力活用の技術開発と温暖化による地力変化の予測について，青山高原の水田を対象に標高による気温差と地力の関係を調査する最新研究が紹介された。

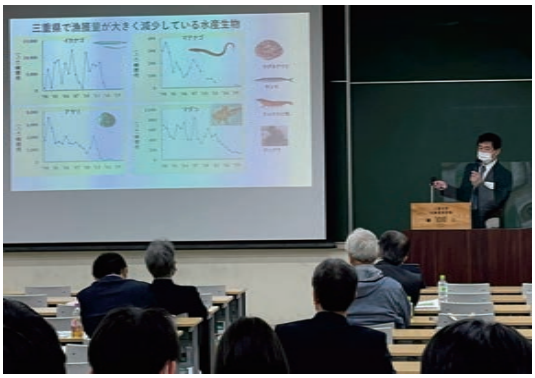
資源循環学専攻　森林環境砂防学研究室
堤　大三（教授）・万田　純菜（資源循環学科4年生）
テーマ『地球温暖化の土砂災害への影響　－氷河湖決壊洪水・流木災害－』

概要：ヒマラヤ地域で発生する氷河湖決壊洪水について取り上げ，気温上昇の影響について現地調査と数値シミュレーションによって行い，土砂災害と共に顕在化している流木災害に対する取組みについて紹介した。



附帯施設水産実験所
松田　浩一（教授）・木藤　裕也（生物圏生命科学専攻　博士前期課程2年生）
テーマ『大きく変化する海洋環境と漁業生産』

三重県が面する伊勢湾と熊野灘では，イカナゴ，マアナゴやアサリが大きく減り，志摩半島では藻場の衰退が著しく，かつてない異変が進行している。要因は明らかになっていないが，地球温暖化等に伴う沿岸水温の上昇と，栄養塩濃度の低下とあわせながら，海洋環境の変化について紹介した。



イベント⑥　100周年記念植樹

100周年記念事業の第6弾として，2023年2月17日にクマノザクラ，2023年2月24日に60本のクロマツが，それぞれ生物資源学研究科棟前と学内の圃場敷地に植えられた。

記念講演会

クマノザクラの発見者：勝木俊雄博士による講演

題名：100年ぶりに発見された野生の桜クマノザクラの特徴と利用

講演者：勝木　俊雄
（博士（農学），森林研究・整備機構　森林総合研究所九州支所　産学官民連携推進調整監）

概要：日本の野生のサクラ属樹木における分類の変遷，クマノザクラの発見と命名に至る経緯，クマノザクラの形態的特徴に加えて他種よりも早い開花特性，普及のための活動の展開について講演された。

満開時のクマノザクラ（長尾美春桜，勝木俊雄氏撮影）

記念写真（伊藤学長，松村研究科長はじめ歴代研究科長らによる植樹）
木製記念碑は演習林職員が作製。後日，三翠同窓会による石碑が設置予定。

記念植樹式

80周年記念樹のソメイヨシノの隣に100周年記念のクマノザクラが植えられました。

クマノザクラ（*Cerasus kumanoensis* T. Katsuki）は，勝木俊雄博士が発見され，2018年に命名された，日本固有の野生のサクラです。ヤマザクラとカスミザクラといった，分布範囲が広く，また，形態的に類似している既存の種があるため，見落とされていたものです。サクラ属のように花が目立つ樹木での新種発見は，極めて珍しいことで，オオシマザクラ以来，日本のサクラ属として実に103年ぶりに新種として発見されました。クマノザクラの特徴は，何といってもその早い開花時期にあります。自生地では，ヤマザクラとの開花期の重複がほとんどみられないほどの早さです。植栽記念樹は，熊野市紀和町長尾に生育する名木「長尾美春桜」の接木苗です。

Katsuki, T.2018. A New Species, *Cerasus kumanoensis* from the Southern Kii Peninsula, Japan. Acta Phytotax. Geobot. 69 (2): 119-126, doi:10.18942/apg.201801 **（文責：木佐貫博光教授）**

記念樹の寄付

クマノザクラの記念樹は中村昌幸氏によって寄付されたものです。中村氏は，生物資源学部第2回卒業生で，現在は鈴鹿市の「木楽Nakamura 」で造園業を営まれています。勝木博士のクマノザクラ発見に至るまでの調査に足繁く同行され，貢献されました。また，寄付のサクラ苗はご自分で接ぎ木し育苗されたものです。

クマノザクラ（勝木俊雄氏撮影）

クマノザクラ苗の寄付者である中村昌幸氏には松村研究科長により感謝状が贈呈された。

抵抗性クロマツ記念植樹

2月24日に雨の中，伊藤学長，松村研究科長，神原副研究科長，橋本副研究科長，酒井理事，生物資源学研究科・学部の教職員・学生により，クロマツ60本が植えられた。植栽場所の整地や看板の設置は演習林職員が行った。

看板は演習林産の木材で製作されました。（板はケヤキ，屋根は百年生のスギ，柱はヒノキ）

記念植樹として学内圃場に植栽されたのは60本のクロマツです。全国的に海岸の防砂林としても植栽されてきたクロマツですが，松枯れのためにキャンパスでも数多くの大木が枯死しています。このため，30本は，枯死要因であるマツノザイセンチュウに抵抗性のある品種が選ばれました。クロマツは成長が早いため，一帯が数年後には林になることが期待されます。

寄附金の募集

生物資源学部・生物資源学研究科の100年の歴史を誇り，今後の教育研究活動をより進展させる基盤強化のため，100周年を機に「三重大学振興基金」の一つとして寄附金を募集しました。

生物資源学部・生物資源学研究科
100周年記念事業

100th anniversary

人類の持続的生存を保障する
食 生命 健康 環境 に関する
農学教育・研究の推進を目指して

生物資源学部・生物資源学研究科は、「生物資源の生産と利用、その生産を支える環境の維持」を目指して、「山の頂から海の底まで」の広大なフィールドを対象に、日々教育研究活動に邁進しています。

昨年十二月には前身の三重高等農林学校の設置から一〇〇周年を迎えました。今後の教育研究活動をより進展させる基盤を強化するため、三重大学振興基金のなかに三重大学生物資源一〇〇周年記念事業のプロジェクトを設置致しました。

みなさまのお力添えを賜りながら、学生支援、留学支援、留学生支援、若手研究者支援、農場・演習林・水産実験所・練習船勢水丸・鯨類研究センター等附属施設の整備拡充に努めたいと考えています。

みなさまの暖かいご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

三重大学生物資源学部長
生物資源学研究科長
松村　直人

≪寄附金受入れ状況≫

- **集計期間**
  2022年6月15日～2023年3月31日
- **寄附者人数**
  計：56人
- **寄附金総額**
  合計：2，296，000円

**※寄附金合計は2023年3月31日時点での状況です。
現在も受付中。**

100th anniversary

三重大学生物資源 100周年記念事業

生物資源学研究科・生物資源学部において、
以下のような支援に活用させていただきます。

- 在籍する学生・留学生の支援、留学支援、若手研究者支援
- 教育環境としての校舎建物・設備の整備
- 農場・演習林・水産実験所・練習船勢水丸・鯨類研究センター等附属施設の整備拡充
- 100周年記念式典の開催、100周年記念樹の植樹、100周年記念誌の発行等

寄附者様への謝意

ご寄附を賜りました皆様には、心より感謝申し上げるとともに、功績をたたえ、感謝状の贈呈、講堂にご芳名銘板設置、本学ホームページにご芳名掲載等さまざまな形で顕彰させていただきます。

寄附者様への特典

一口3万円以上のご寄附の方には、大学オリジナル年度カレンダーほか、100周年記念オリジナルグッズを贈呈いたします。

ご寄附による税制上のメリット

ご寄附につきましては、税制上の優遇措置があります。
詳しくは、三重大学振興基金のホームページ（https://www.mie-u.ac.jp/foundation/）をご覧下さい。

≪生物資源学研究科学生・院生の現在≫

令和4年（2022）5月1日現在の在学学部生・大学院生数

学部等		1年				2年				3年				4年				計			
		定員	現員			定員	現員			定員	現員			定員	現員			定員	現員		
			男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計
生物資源学部	資源循環学科	70	40	34	74	70	42	32	74	73 (3)	39	36	75	73 (3)	50	29	79	286 (6)	171	131	302
	共生環境学科	70	49	25	74	70	51	21	72	73 (3)	51	25	76	73 (3)	62	24	86	286 (6)	213	95	308
	生物圏生命化学科	80	30	53	83	80	32	51	83	82 (2)	32	49	81	82 (2)	41	52	93	324 (4)	135	205	340
	海洋生物資源学科	40	29	12	41	40	29	13	42	42 (2)	29	12	41	42 (2)	29	13	42	164 (4)	116	50	166
	計	260	148	124	272	260	154	117	271	270 (10)	151	122	273	270 (10)	182	118	300	1060 (20)	635	481	1,116
大学院 生物資源学研究科	博士前期課程	88	66	33	99	88	50	35	85									176	116	68	184
	博士後期課程	12	12	1	13	12	9	6	15	12	6	4	10					36	27	11	38

( )内は，3年次編入学定員を内数で示す。

大正13年（1924）～令和3年（2021）までの卒業生・修了生数

区分	学部等	期間（年度）	卒業・修了者（名）
専門学校（旧制）	三重高等農林学校	1924～1942	1,931
	三重農林専門学校	1944～1951	1,627
大学（新制）	三重大学農学部	1952～1992	6,978
	三重県立大学水産学部	1953～1974	995
	三重大学水産学部	1975～1992	944
	三重大学生物資源学部	1991～2021	8,381
大学院	大学院農学研究科 修士課程	1967～1988	378
	大学院水産学研究科 修士課程	1977～1988	107
	大学院生物資源研究科 修士課程	1989～1992	152
	大学院生物資源研究科 博士前期課程	1992～2021	2,847
	大学院生物資源研究科 博士後期課程	1993～2021	440 [課程341，論文98]
別科	農業別科	1951～2008	609

2021年までの卒業生・修了生累計：2万4千9百49人

編集後記

本日午前中に100周年記念石碑の除幕式が生物資源学研究科校舎前にて行われ，これで，生物資源学研究科100周年記念事業関連行事はすべて終了しました。

100周年記念事業は1年間以上にわたり実施されました。「100周年記念誌」も記念イベントごとに記録するというスタイルにしたのは，記念事業を通じて，皆様と一緒に，研究科の歴史を振り返りながら，現時点での研究科の教育・研究の実態を把握し，未来の研究科を展望していきたいと考えていたからです。

本記念誌は，これまでのような図書館に保存するための「歴史的資料」としての記念誌ではなく，より多くの方々により便利に簡単に研究科の「過去と現在」を知ることができ，さらなる発展に繋がるための「広報誌的資料」として提供することをコンセプトとしています。

本記念誌の作成に当たり，記念誌部会員も数多くの歴史的資料の収集と整理を通じて，研究科の偉大な歴史を改めて認識し，今日までの研究科の素晴らしい発展に多くの感動を与えられました。その感動を本誌を手にしている皆さんにも伝えることができれば幸せです。

最後に，本誌の発行に多大なご支援を頂きました三翠同窓会を始め，本記念事業の遂行にご尽力頂きましたすべての方々に，この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2023年5月24日

記念誌部会　一同

石碑は三翠同窓会からの寄贈

≪生物資源100周年記念事業実行委員会構成員一覧≫

		委員長	奥村克純・松村直人		
イベント部会	◎	吉岡基	長屋祐一	野呂真稔	
		苅田修一	伯耆匠二	山下泰子	
		渡邊晋生			
広報部会	◎	橋本篤	森尾吉成	内山理恵子	
		田丸浩	木村妙子	日比野麻里	
ロゴマーク部会	◎	松村直人	陳山鵬	神原淳	
		伊藤美知	田丸浩	伊藤晴美	
植樹部会	◎	木佐貫博光	北上雄大	加藤元保	上尾京子
		鳥丸猛	沼本晋也	上尾智洋	小嶋優人
		板谷明美	渕上佑樹	山本拓史	新田昌臣
		松田陽介	竹中麻由	足立光正	日置千鶴代
記念誌部会	◎	常清秀	山田二久次	研屋元弘	
		勝崎裕隆	岡﨑文美	伊藤智仁	

注：◎表示は部会長

≪生物資源100周年記念誌≫

編集・発行　三重大学生物資源100周年記念事業実行委員会

発行年月　2023年5月31日

©2023　Graduate School of Bioresources, Mie University

® 本記念誌の全部または一部を無断で複写・転載を禁じる。